

鹿児島の昆虫⑭ 希少種タイワツバメシジミ その保護に光明さす (特集)

昆虫担当 中峯 浩司

本種は全国的な希少種であり、最も絶滅の恐れがあるとされる絶滅危惧Ⅰ類に指定されています。鹿児島県内では、県本土の他、近隣の離島にも生息し、さらにトカラ列島以南には別の亜種が分布します。

成虫は主に年1回、食草シバハギ(マメ科)が開花を始める9月上旬頃から発生します。また、シバハギの早咲き株が生育する地域では6月から成虫が見られることもあります。

秋、花穂に産み付けられた卵からふ化した幼虫は、つぼみや花、若い果実を食べて育ちます。飼育下では、幼虫は10～11月に終齢になって休眠に入り、冬を越した後も摂食することなく過ごし、翌年の夏から初秋に蛹化、そして羽化することがわかっています。

シバハギは、道路工事による裸地や休耕地などに侵入して群落を作ります。しかし、他の植物が成長すると次第に衰退し、やがて消滅してしまいます。本種は、このような生育地が変化する不安定な植物に依存した蝶です。これは、しばしば人の手によって草刈りが行われるような場所が、本種にとって最も安定した生息地になることを意味しています。実際、過去には各地に多産地がありました。

ところが、本種は1980年代頃から全国的に減少傾向が顕著になりました。農業形態の変化により草刈りが行われなくなったことや

草地の管理の変化によってシバハギが少なくなったことが主な原因と考えられました。しかし、シバハギは残っていても本種が見られなくなった場所も多く、本種の減少要因の本質はつかみかねていました。

こうした中、2006年になって状況は一変します。鹿児島市在住の熊谷信晴氏によって、野外で越冬中の複数の幼虫が発見されたのです。す



タイワツバメシジミ 羽の長さ約12mm

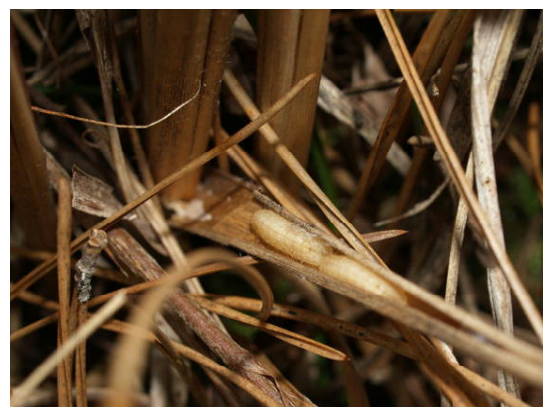
なわち、熊谷氏は幼虫を飼育した際の休眠場所にヒントを得て、幼虫がシバハギとともに生えるススキが枯れた葉の隙間で休眠していることを発見したのです。

これまで不明であった休眠場所が明らかになったことにより、本種減少の一因として幼虫の休眠場所を奪ってしまったことが注目されるようになるとともに、今後の草刈りの時期や方法など、本種の保護の在り方に重要な方向性が与えられました。

今回は、鹿児島の蝶を愛してやまない熊谷氏に敬意を表し、本人の了解を得てその功績を併せて紹介させていただきました。



シバハギの群落



ススキで休眠中の幼虫2匹 (葉をむいたところ)